

ごあいさつとテキストの配布（初版）について

2016年11月22日

ー障害をお持ちの人が介助を必要とするときみなさんはとても大切な存在となるでしょうー

■特定非営利法人えがくは、2011年に法人格を取得し最重度の障害者の地域生活を支えるために介助派遣事業をスタートしました。最重度というのは、介助の必要度と介助量がとても高くとても多いということであり、それは時間でいうと24時間介助が必要になる例がほとんどです。

■この日本では福祉の前進とされてきた入所施設がたくさんつくられ、おおくの障害者が入所しました。その理由は家族介護の限界・社会資源の不足・排他的社会の代償で、その結果施設の是非を問う社会問題にまで発展しています。その入所施設に余儀なく入ることを優先されたのはまぎれもなく最重度の障害者でした。

■一方で世界を見てみると、障害を持って生まれるということはたまたまであり、その家族と障害者に固有の問題ではなく、ましてや親が一生面倒を見なければいけないわけでもないという考えに変わってきました。社会のあらゆる部分に障害（障壁＝バリア）を見いだすことで、その障害者にとって必要なサポートさえあればだれでも好きな場所で、他の者とひとしい、社会生活を送ることが当たり前である、という理解がメインストリームになっています。私たち日本でもゆっくりですが着実に考え方は変わってきています。

■特定非営利法人えがくは、日本における最重度の障害者の境地を知ったうえで、最重度の障害者をサポートしその人がまた最重度の障害者をサポートすることで、福祉サービスに欠落しがちな当事者性を確保し、その人に必要なサービスの調整と利用を推し進める事業を展開してきました。当法人の理事の過半数は最重度の障害者であり、その責務を担っています。

■入所施設や親元をはなれ地域で生活をする障害者は増加傾向にあり、日常生活行為全般に介助を必要とする障害者にとって介護者・介助者の確保と育成は焦眉の問題になっています。当法人は最重度の障害者がみずから介助者を育成し、当法人のサービス提供責任者を輩出してきた実績をもとに、ニードを重視したサービスの提供のあり方をひろく伝える当該研修を実施しています。

■当法人の研修の特質は、障害者みずから研修の場に参加参画し当事者性を発揮しながらニード重視のサービス提供のあり方を伝えることで、当事者性の視点をあわせ持った介護者介助者の育成に寄与します。当事者性の発揮にとっても大切なことは「介助を受ける側の思いを感じること」です。

■特定非営利法人えがくの研修を受けた人たちは、地域で生活をする障害者にとって欠かすことのできない大切な存在です。私たちは全力でこの仕事をこころざす人を応援し、より良い介助者ライフのスタートがきれるよう尽力します。あなたは必要とされていることを忘れないでください。

特定非営利活動法人えがく 理事長 岡田健司